埼玉岳連

埼玉県山岳連盟
埼玉岳連報　第25号
発行者　田中　文男
発行所　埼玉岳連事務所　村岡正己
〒340-0211
鷲宮町鷲宮団地1-28-407
編集人　岩井田 正昭
発行部数　1600部

2位入賞の(左)門間選手と(右)落合選手

【巻頭言】

埼玉県山岳連盟　会長　田中　文男

埼玉県山岳連盟が創立されて、五十年が過ぎ去った。私達は次の時代への新たなステップとして昨年、記念の式典を開催し、多くの方々においで頂いた。

その中の事業のひとつとして、ヒマラヤの高峰ナンガパルパッドに本年七月登山隊を派遣することになっていた。

私自身、総隊長として名を連ねさせて頂き、隊員にはぜひ登頂を果たして貰いたいと念じていた。

しかし、私たちの古い山仲間、小澤直宏副隊長が、6200mの地点で行方不明となってしまった。

頂上が踏める、踏めなかったという結果よりも、全員無事に帰って来て欲しかった。それが果せなかったことが無念である。

いずれ詳しい報告はさせて頂くが総隊長としてこのような事故が発生したことに、御家族を初め関係する全ての方々にお詫びを申し上げたい。

その中で第六十一回国民体育大会クライミング競技会で少年女子が二位となってくれた。

小澤さんがいたら、あの優しい笑顔で喜んでくれただろう。

平成 18 年 8 月 29 日

関　係　各　位　様

埼玉県山岳連盟
会長　田中文男

埼玉2006ナンガパルバット登山隊事故報告について

「埼玉2006ナンガパルバット登山隊」派遣につきましては、格別のご協力、ご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、新聞紙上等の報道によって、すでにご承知のことと存じますが、登山隊は隊員の転落、行方不明というアクシデントに見舞われ、登攀活動を中断。ただちに救助活動に全力を注いで参りましたが発見に至らず、やむなく去る８月２２日、全員が帰国致しました。

簡単に経過をご報告致しますと、現地時間７月２８日午後４時４０分頃、ナンガパルバット西壁ノーマルルートで登攀活動中の小澤直宏副隊長がＣ２（第２キャンプ：6100m）からＣ３(6800m)への荷上げを終え、Ｃ３からの下降中、Ｃ２の上部・約6200m付近より転落、行方不明となりました。

事故は日本の留守本部に報告されると共に、現地では全隊員をはじめ多数のハイポーター等を救助活動に投入。さらにヘリコプターを２機チャーターし、２日間に渡って上空からの捜索、救助活動を行いました。しかし残念ながら発見に至らず、総隊長である田中会長の指示により事故から８日目の８月４日、捜索活動は中断致しました。８月５日、ご家族と共に田中会長も現地入りし、これまでの経過と今後の対応について話し合って参りました。

現地では日本大使館、地元警察等、多くの方々のご協力が得られ、お陰様で差し当たっての必要書類等も受理することができました。また、登山隊は現地での残務処理等の諸活動を終え、先に申し上げましたように８月２２日に帰国致しました。

多くの方々に、大変ご心配をおかけ致しましたこと深くお詫びすると共に、今後ともよろしくお願い申し上げます。

なお、過日、埼玉県山岳連盟内に事故対策委員会を設置、今後の様々な問題に対応していくこととなりました。引き続き皆様方のご支援、ご協力、ご理解を賜りたく重ねてお願い申し上げます。

埼玉2006ナンガパルバット登山隊　事故（仮）報告

1．登山隊の組織

【登山隊の名称】　埼玉2006ナンガパルバット登山隊

【主催】　埼玉県山岳連盟

【隊の構成】

登山隊総隊長	田中 文男
登山隊長	福田 靖
副登山隊長	小澤 直宏
登攀隊長・総務	天野 賢一
渉外・会計	烏 辰克
装備・記録	石橋 修
食糧・会計	藤井 大輔

【登山隊事務局】　加藤 富之

2．登山隊行動記録

（1）日本出発から登山活動までの概要

登山隊本隊（５名）は７月５日に日本を出発し、当日夜遅くイスラマバードに到着。翌日より、イスラマバードでの準備活動を開始した。

まずは現地エージェントである日パ旅行社を訪ね、打合せ。その後２日間に渡って、観光省ブリーフィング、ヘリコプターブリーフィング等、諸手続。また装備、食糧、医療品の点検、そして不足品の購入とパッキングを行った。イスラマバードは40度近い猛暑で隊員全員の疲労と消耗が激しく、ハードな準備活動となった。

イスラマバードからチラスへは７月８日早朝に出発。コースター２台にてカラコルムハイウェーを走り、19:55チラス到着。約１５時間に及ぶ車の移動に全員疲労の色が濃い。加えてチラスは40度を超える酷暑で、夜間もドライヤーのような熱風が吹き付ける厳しい環境。そのため体調を崩す隊員が出始める。チラスには灯油・野菜等の生鮮食料品の買い出しのため翌日も滞在し、７月10日早朝にいよいよキャラバンに向けチラスを出発。コースターから途中ジープに乗り換え、ハラレ橋到着。ハラレ橋を7:00出発。キャラバン一日目の宿泊地メスナースクール（アッパルジェル村）には15:15到着。あまりの暑さに、予定では６時間の行程に８時間以上かかってしまった。

キャラバン二日目（７月11日）は歩行時間７時間ほどで、クッドガリ（夏村：近隣の村人が放牧のため夏の間だけ使用する村）の草原に到着。快適なキャンプサイトであった。キャラバン三日目（７月12日）は景色や花を眺めながらゆっくり歩き、昼前にＢＣ（4200m）到着。ここまで来るとさすがに涼しく、あまり深刻な高度障害もなかったが、下界で蓄積した疲労のためか、それとも食事のせいか、発熱や下痢などで寝込む者もいた。

７月13日～15日の３日間は装備、食糧の点検、仕分けなどを行い（ハイポーターはＣ１への荷上げ開始）、不足品や紛失した物などを日パへ連絡。後発隊・トレッキング隊と一緒に荷上げしてもらうよう手配する。なお後発隊（１名）及びトレッキング隊（５名）は７月14日に日本を出発。同日夜遅くにイスラマバードに到着。翌日には予定通りイスラマバードを出発し、チラスに到着した。

本隊は７月16日から登山活動を始め、まずは日帰りでのＣ１（5000m）への荷上げを主に行う。並行して、事前の高度順応を行うはずだったガナロピーク（5867m）のルート偵察を２回おこなったが、ルートが見いだせず、ガナロピークは断念。７月18日、後発隊（１名）・トレッキング隊（４名）がベースキャンプ到着。トレッキング隊はＢＣに１日滞在した後、７月20日下山。

７月19日以降は６名での登山活動に入り、７月21日からは３人ずつ２パーティ（Aパーティ＝福田、天野、

藤井。Bパーティ＝小澤、烏、石橋）に分かれて、Ｃ１への宿泊、キンスホッファークーロアールの試登（中間まで）を行い（Aパーティは7/21～22、Bパーティは7/22～23）それぞれＢＣへ下山。

（２）事故発生までの行動記録

７月24日からAパーティはＣ１入り。翌25日、鷲ノ巣岩壁（通称：鷹ノ巣岩壁）を登りＣ２（6100m）に入り宿泊。26日はＣ２でステイ。27日早朝Ｃ２を出発し、Ｃ３（6800m）を建設後Ｃ２へ下山。事故当日（28日）はＣ２で、Ｃ３に向かうBパーティを見送った後ＢＣへ下山する。

BパーティはAパーティから１日遅らせてＣ１に入り（25日）、以後その間隔を保ち行動。26日にＣ２入り、27日Ｃ２ステイ、28日Ｃ３への荷上げ、と推移した。

７月28日、Bパーティは6:30にＣ２を出発。下部の岩稜帯から上部氷雪壁までほぼ問題なく登り12:30～12:50にかけて各々Ｃ３到着。荷上げした装備をテントに収納した後、14:30下降開始。この頃から天候は急激に悪化。雷が鳴り、アラレが激しく降り始める。上部の雪壁を通過し、下部の岩稜帯に入る頃から天気は回復し始める。岩稜帯に入り数ピッチ下ったところで先頭の石橋隊員が休憩（約6200m付近）。10分程休んだところで（16:40）、上部から２番目を下山中だった小澤副隊長が転落してきたのを目撃。山側を向いて休憩中だった石橋隊員の右側を落ちていき、鷲ノ巣岩壁側から尾根を隔てた本峰側の谷へ転落・行方不明となった。

石橋隊員はただちにＢＣへ無線交信。ＢＣからは、自分の居た箇所のマーキング、すぐに下山しＣ２のハイポーターに事故の件を伝え救助体制を整えるよう指示。石橋隊員は18:00前にＣ２到着。ハイポーター（２名）に事故を説明。烏隊員は18:30、Ｃ２到着。その後ハイポーター及び隊員でＣ２から可能な限りの範囲を捜索するが、本人または手がかりとなるものは発見できなかった。

（３）事故後の捜索状況

７月28日 16:40、Bパーティの石橋隊員より事故の第一報がＢＣに無線連絡で入る。ただちに現場の隊員に救助・捜索体制の整備を指示。その後、日パトラベルにヘリコプター要請を依頼。

また日本の登山隊事務所へ第一報を入れる。日本の田中総隊長からは登山活動をただちに中止し、捜索に専念するように。ただし２次遭難だけは起こさないように、との指示を受ける。

夜間は無線を開放し、斜面上にヘッドランプの明かりが見えないかを捜すが、何も見つけることができなかった。

翌７月29日早朝、捜索のためチャーターしたヘリコプター２機が到着。パイロットとの打合せ後、福田隊長、天野隊員が１機ずつに分乗し、現場上空から約35分間にわたって捜索。藤井隊員、ハイポーター１名はＣ１まで捜索に登る。Ｃ２では石橋隊員、ハイポーター２名で事故現場の捜索に向かい、現場付近の捜索と調査を行うが何も発見出来なかった。ただし転落方向の特定はでき、昨日の方向で間違いないことを確認。Ｃ２の隊員２名、ハイポーター２名は30日にＢＣまで下山した。

翌日からは連日可能な限りのルートから捜索活動を続行。さらに現地村人やポーターも雇用し、あらゆる方向から現場付近の捜索を行った。８月１日には再度ヘリコプター２機をチャーターし、リエゾンオフィサーと天野隊員が１機ずつに分乗し上空から捜索。かなりの低空で捜索したが手がかりとなる物は発見できなかった。

事故から８日目の８月４日には再度Ｃ１まで登り、付近の捜索を行うが手がかりなく下山。同日夕方日本の登山隊事務局・田中総隊長より衛星電話にて、捜索活動の断念とBC撤収の指示を受ける。これをもってひとまず捜索活動を終了とし、８月５日にＢＣの撤収準備。８月６日、ＢＣを撤収し下山を開始した。

（４）ＢＣ撤収以後の概要

８月６日、ＢＣを撤収し、早朝福田隊長とリゾンオフィサーの２名は現地警察・行政各関係機関での諸手続きのため先行して下山。６日中にチラスまで下山した。本隊はメスナースクール（アッパルジェル村）で１泊の後、８月７日ハラレ橋を経由しチラスへ下りた。

チラスのパノラマホテルでは先行して下山した福田隊長、リエゾンオフィサー。本隊４名、さらに日本を８月

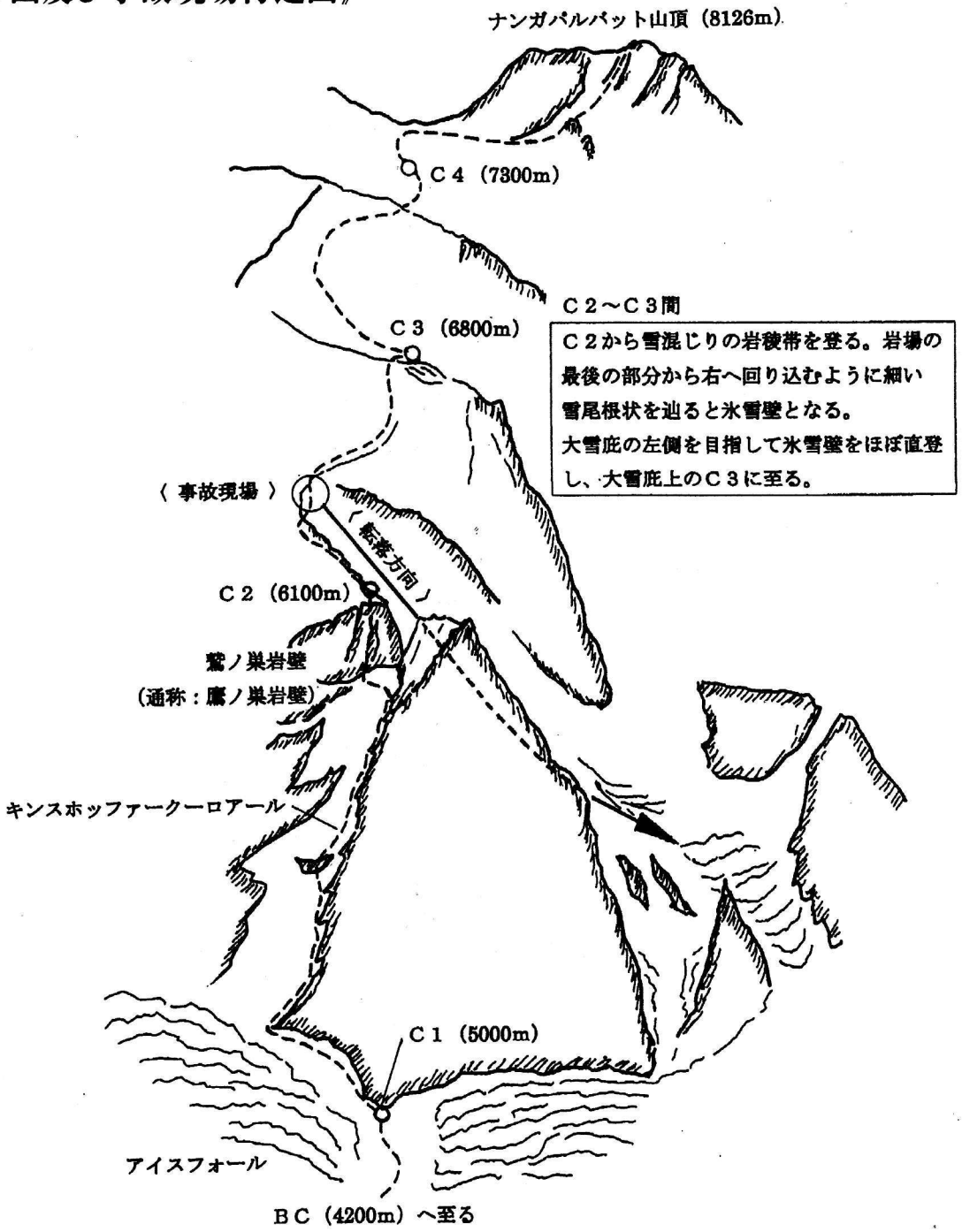
５日に発った田中総隊長、小澤さんの奥様・ご長男、鈴木さん（海外登山委員）の４名、全員が合流。ご家族には事故の状況等を説明、また今後の予定についても打合せをおこなった。

翌日は車でカラコルムハイウェーをギルギット方面へ向かい、ナンガパルバットのビューポイントを訪れる。８月９日、チラスからイスラマバードへ移動。８月10日、田中総隊長、ご家族、鈴木さんは日本大使館へ挨拶に伺い、帰国に間に合うよう作成していただいた必要書類を受け取った後、陸路ラホールへ。深夜発のフライトにてパキスタンを発ち、翌８月11日日本帰国。

登山隊はその後残務整理に追われながら、１日も早く帰国するためチケットの変更に努力したが、お盆休みの影響で全くチケットがとれず、イスラマバードに足止め。二転三転どころか数え切れないほど状況の変転をくり返し、８月16日にようやく８月21日深夜ラホール発のチケットに変更。８月22日、登山隊５名、日本帰国となった。

（文責 天野賢一）

《ルート図及び事故現場付近図》



のじぎく兵庫国体山岳競技会
クライミング決勝観戦報告

埼玉県山岳連盟　村岡正巳

早稲田実業のハンカチ王子（斉藤祐希投手）が登場する高砂市球場では、7000人の観客が押し寄せたそうである。「汗」と「涙」がスポーツの代名詞であったが、今年は「青いハンカチ」がそれに加わった？これは、その高砂市球場から約50km離れた、ポートアイランドの記念ホールでクライミングに「汗」と「涙」を流した少女の物語である。

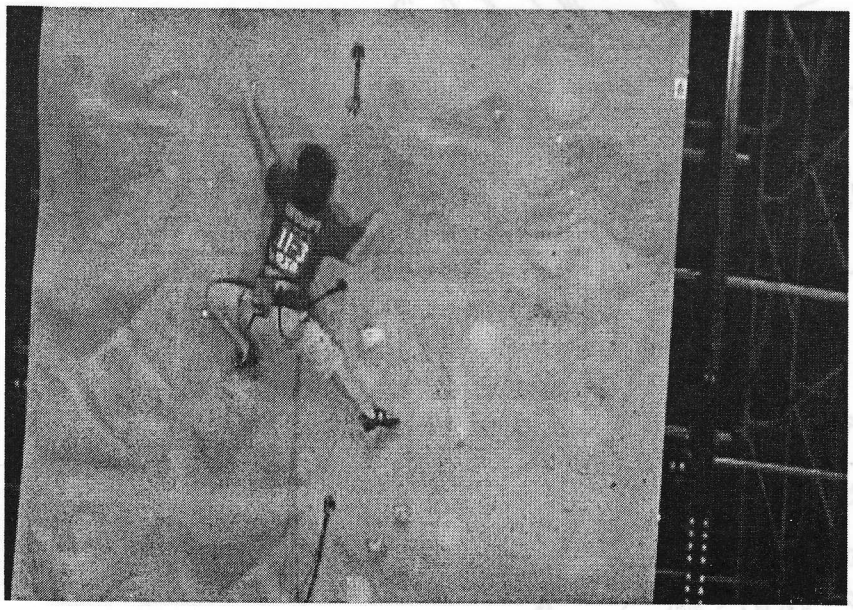
今回の山岳競技は、都市開催でアプローチの面では最高。特にクライミングは、関東でいうとお台場でやっているようなもの。10月3日クライミング決勝の話をしよう。競技会場には、客席が囲むアリーナの中央に赤いカーペットが引かれ、その上に4×15mの壁が4面そそり立っている。嫌が上でも闘志の湧くようなシチュエーションだ。

8：40分、その赤いカーペットの上でオブザベーションが始まる。まだ、観客もまばらな会場に音響のBGMだけが鳴り響く。ルートを体の記憶として取り込んでいる彼女たちには、その音楽さえ耳に入らないであろう。

少女決勝の壁は下部－10°、上部＋130°。以上といった傾斜で、傾斜が強くなる9mまでは壁の中央をストレニュアスだが左右に小さく振るルートが続く。傾斜が増す手前に最初の核心がある。スローパー系のホールドから左足をハイステップ気味に決め、左手で遠いホールドを取りに行く。

そして右にトラバースし傾斜の強い上部に入る。上部は、大きく左右にトラバースを繰り返すルート。ホールドはガバ、持久系のルートに感じる。手数は45～46手といったところ。見た感じは5．12a？

さて埼玉は、予選2位であったため決勝は7番目の登場。スタートラインに落合、門間が緊張気味に登場。いよいよスタート。左を落合、右を門間が登る。落合は、手順を確かめるように手を数手動かしてから壁に取り付いた。門間は、終了点を確認するかのように遠くを見つめ大きく深呼吸し登り始めた。2人とも順調に高度を稼ぐ。埼玉応援団の誰もが門間は大丈夫という思いからか、必然と声援は「落合イケ～！いいぞ、落ち着け・・・」となっていた。背の低い落合には下部のルートもやや遠いホールドに感じるだろう。伸びきるムーブが続くが確実にこなしている。最初の核心にたどり着く。

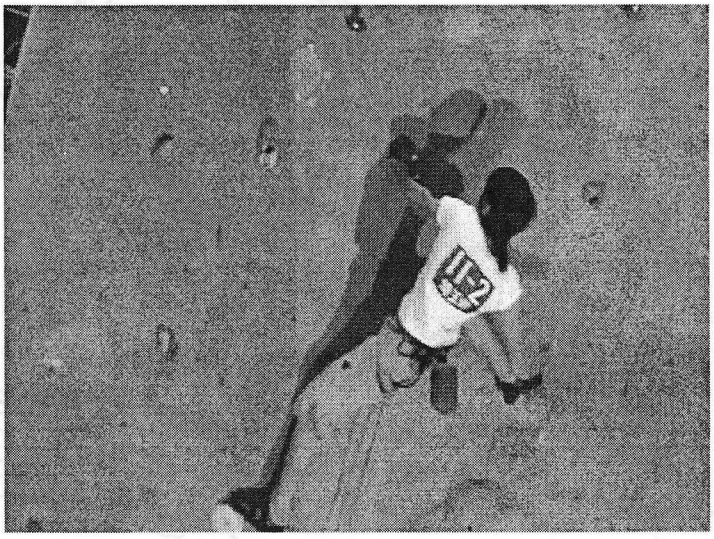


少年女子：落合選手

いい距離。飛びつくようにホールドを取りに行くがあと数cmでフォールとなる。ランナークライマーは殆どこの場所で落ちているので、役目は十分果したと言える。

さて、門間は余裕のムーブで壁の中を一人旅。上部で2回蛇行するトラバースも手が決まれば問題ないようなルートで確実にポイントを稼ぎあっと言う間に完登。だが、最後の千葉も白石が完登。もう1人のポイントが1手高かったために千葉が1位、埼玉2位となる。惜しかったが、本番で持てる力を出し切り素晴らしい結果に終わってよかったと思う。選手、関係者の皆さんお疲れ様でした。最後に落合の涙に、スポーツと青春を感じたオジさん達は、ルートがもう少し難しければ門間のみの、完登で埼玉が1位だったと自分たちに言い聞かせたのでした。それにしても、表彰式は長かった・・・

完



少年女子：門間選手

【第六十一回国民体育大会】
のじぎく兵庫国体　山岳競技会

競技別結果　速報

少年女子…クライミング　第　2位（落合、門間）
少年女子…縦　走　第13位（中村、落合）
成年男子…クライミング　第29位（本橋、島村）
成年男子…縦　走　第　9位（早田、本橋）

埼玉県山岳連盟　選手強化委員会

【パキスタン・ディアミール谷】トレッキング　報告

埼玉県岳連創立50周年記念
ナンガパルバッド登山隊BC往復
2006年7月14日～7月24日
L小澤直宏（往路のみ）早船光昭　芝田信子
堀江伸子　内山智子　松木恵子（記）

久々のバカンス、解放されて楽しんでこようと思い立った。パキスタンの治安について思い悩んでも、日本にいたって絶対安全なんてありえないし、なるようになると思い、参加を申し込む。パキスタン、ナンガパルバッドについては、良く知らないけれど、そして調べることもしないまま出発、となった。

2週間前の富士山での高所トレで顔なじみとなったメンバーと成田で集合して、ようやく休みを、つくるのに忙しく追われた日々から解き放たれた気持となる。田中会長の見送りを受けて、出発。

思っていた以上に窮屈なフライトでイスラマバードに到着。エージェントの出迎えを受けて車に乗り込む。ほとんどが日本車だ。そして豪華なホテルに連れていってもらう。ゆっくりと泊まりたいのだが、翌日は4時半には起きなければ。そして翌朝ハイエースで長いドライブが始まる。

7月15日

カラコルムハイウエイを飛ばしていく。町中を抜けると、日本の高原のような松の多い傾斜地に入る。途中昨年の地震の影響で壊れや建物を多く見る。中国語で救援と書かれたテントもあり、中国は隣国であることを気づかされる。このカラコルムハイウエイも中国が作ったようだ。傾斜地に作られた段々畑、棚田があちこちに見られる。やがてインダス川沿いに走る。氷河の集まりで茶色く濁った大河だ。谷から流れ込む清流があるところに町が作られているようだ。バザールには恐ろしいほどの人が、それも男の人ばかりがいる。きれいに並べられた野菜、果物を買いたかったが、たぶん私なんかがでしゃばっても迷惑をかけるだけ、だまって眺めていることにする。疲れているはずなのだが、見るもの見るものがおもしろくて、眠っていられない。対岸の山肌に続いている道がどんなふうに繋がっているか?、あの山の上の家にいくにはどうやっていくのか?やぎをつれた子供の家はどこなのか?関係ないけど、じっと見つめてしまう。車に乗っているだけだが、食事、お茶はしっかりととる。パキスタンの食べ物はとってもおいしい。お茶も、ごはんもカレーも、全部お気に入り。夕方のお茶がすんでも、あと200キロ以上はあるようだ。

なにせ追い越しのマナーも怖ければ、道路自体も怖い。それでも大分慣れてきた。運転手さんは今朝5時からずっと運転しているのだから、仕事とは言え大変なものだ。夜9時頃目的地のチラスの手前でゲートがあり停められる。夜は安全の為、交互通行らしく、30分以上待たされる。その間、降るような星を見る。さそり座がくっきりと南の空にあった。ゲートがあいてパトカーの先導で広い道までいき、10時半にチラスのホテルに到着。ひっそりと寝静まっているのかと思えば。まだ食事をしているトレッカーがいっぱい。冷風扇の凄いのがある部屋だった。快適に眠る。

7月16日

5時半に起きて準備していたが、どうやらポーターの都合がつかずに、9時半の出発となるようだ。早船さんがインダス川にいくというので一緒にでかける。ホテルをでると物珍しそうに見られる。川に向かう小道にはいると子供たちが「ヘロー、ピクチャール!!」とぞろぞろと集まりだす。戻るにももどれず、こころを決めて早船さんを追っかけ、インダス川の水にふれる。濁っているが汚さはなく、冷たい。砂浜ができていた。見せ物のような状態だったが、写真をとるからどいてというと素直にどいてくれた。ホテルに戻ると出発準備ができたようで、出発。途中ブナールでジープに乗りかえるらしい。ポーターに渡すために、少し荷物を入れ換えたり大事な瓶を包んだりした。計量に時間がかかるらしく、しばらく休憩。とはいっても夏の炎天下は暑く、建物の中も大差ない。

日影でしばらく待ってから、いよいよランクルに7人乗り&後ろにつかまり立ちで8人で悪路をいく。ダートで山道、その上、下ってくる車が結構多く、行き違いの度に、心臓がどきどき。運転手のハクさんは楽しげにナンガコースターは楽しいかい?てな感じで、でも的確にハンドルをきる。ようやく少し楽になるとムジクといってパキスタン音楽のテープをかけてくれた。後ろに立っていたガイドのクレシードさんは前の車がスタックして押してあげたので、そのままその車に乗っている。平和だ。ハラレ橋に到着。今日はここまでの短い行程。やっと自由時間がもてる。

なにせ何もしなくていいのである。テントも張らなくていいし、荷物も運ばなくていいし、食事の手伝いもしなくていい。手持ちぶさただ。私は栽培植物の観察をしたくて、きれいな段々畑の見える村まで散歩にいきたいと伝える。ちょうどその村から子供達がきていたので、クレシードに話して、ガイド役を決めてもらい、デュアムロイの村に向かう。遠くからみるとしっかりした道だと思ったが、乾いて急な上り下り、滑りそうな道である。どの村もそうであるが水路によってなりたっているようだ。先にたって進んでいくと、内山さん不調ということで少し待つ。次に内山さんが戻るので早船さんも戻るという声が届く。せっかくなので、私と堀江さんは村見学に。トウモロコシ畑と胡桃の木、桑の大木、そこにまきつく葡萄。

木陰は涼しげな風が吹き抜ける。氷河の水を長い水路で引いてきて、生きている。どんな暮しなのかは判らなかったが、時間はたっぷりあり、食べ物も不足はしていないように見えた。もっとこの山の民から教えてもらいたいことがあると思うが、さすがに戻らなければならない時間となり、キャンプに戻る。ガイド役の子はもう役は終わったと途中で帰ってしまった。

キャンプに戻ると、大変なことになっていた。早船さんが足の筋を痛めて歩けないという。明日からは別行動するしかない。ちょうどジープもあることだし、チラスでおとなしくしているか、何処かにドライブするか。それにしても、途中じゃなくてよかった。キャンプ最初の晩の食事は最高。すべておいしく、安心する。テントの中に細かい虫がいるようで痒い。

7月17日

6時過ぎに出発。早船さんと分かれ、トレッキングのスタート。昨日行った村を通り、なだらかな道を辿る。しばらくは道もよく、植物に気をとられながら進んでいった。石積の細い道ですべて手作業で直しているのだろう。帰りに誰が直すのかと聞いたら、村の人達ということだった。日本でも昔は道普請といえば、無償で村の人が出て直したことだろう。金銭ではない世の中が残っているのだ。

やがて登りになる。暑さに強い私はなんでもなかったが、みんな結構つらそうである。水のある場所で休む時はシャツの上から水をかける。芝田さんは足がつってしまって、今まで経験したことのない状態に困り果てている。休み休みマッサージしながら登っていくが、塩を舐めてみたらかなり効いたようだ。もうほとんど飲み水がなくなり、そして沢水は湧水だと教えてくれたので、ちょっと躊躇したが、誘惑に負けて、がぶがぶと沢水を飲んでしまった。そこで休んでいたら、ポーター達は沢水は飲まずに、すぐそばの小さな泉の水に口をつけて飲んでいた。私達は間違いを冒したのだろうか?まねして、最後に泉の

水を飲んでみた。冷たくておいしい。ゆっくりと急な登りを登り終えアッパルジェルの村に着く。大きな胡桃の木が休み所。到着したとたんにクレシードが胡桃の実を差しだしてくれた。マジシャン?そこでおいしいミルクティーを飲み、建築中のホテルに向かう。村の上の方にあり展望が良い。夕方は涼しく、汗をかいたことを忘れるようにサラッとしている。このTシャツはもう4日間着ているけれど着替える気にならない。ポーターの人達はウールを着ている人もいる。でも汗の匂いはしない。乾燥している気候とは、こういうことなんだ。

連れていた鶏が肉になったようだ。それにしても、毎食おいしい。でも今夜は日本のアルファー米。これはいただけない。

7月18日

なんとなくトイレに行くタイミングと場所が読めてきた。最初は結構むずかしかったが。今日はベース入り。私にとっては、高所に突入。最初の予定では、今日の日程は二日かけていく筈だったが、一日で行くのだから、気を引き締めていく。

昨日の芝田さんの様子から、クレシードがハラス（馬）を提案していた。こんな電話もない所でどうやって馬を調達するのか疑問に思っていたが、道が平坦になる次の村で突然馬が現れた。裸馬に乗ったおじさんが馬から降りてにこにこしている。

白樺の森に馬が現れ、これって現実?とりあえず試してみればと芝田さんは馬に乗る為に岩に登り、両側から支えられて、馬上の人となって、あっという間に見えなくなってしまった。残された私達は、高所の影響も出始め、堀江さんから救心の粒をもらい、ゆっくりと、それでも花を見ながら歩いていった。いつのまにか、広い放牧をしている村にはいる。ここが最終の村コトガリー。アッパルジェルなどの村から家畜をつれてきて夏のあいだ放牧していて、秋には村に戻り、畑の中で過すそうだ。そして春家畜を出した畑に種を蒔く。究極の循環農法ではないか。美しいデァミール谷にたくさんの動物が草を食み、マーモットの鳴声がこだまする。植物は短い夏にいっせいに花をつけ、咲き乱れている。子供たちは遠くに離れたやぎなどに石を投げて追い返している。時間が止まっているように、何百年もこうした情景が続いているのだろうか?そこにいる個体の命は終わっても次の命が同じように情景の一部と成り代わり、全体としては同じ状態を続ける。何もかもが変わってしまう日本にいると、変わらないということがどんなに重要なことか。心に突き刺さる情景であった。

放牧地を過ぎ、いよいよベースへの登りにかかる。とにかく息を吐くことと自分にいいきかせ、なんとか歩き続ける。途中まで隊長の福田さんが迎えにきてくださり、ゆっくり歩きに付き合ってくださる。内山さんも不調のようで時々姿が消える。ベースのテントが見えるケルンを過ぎてからも二つくらい沢を渡らなければならない。ぜいぜいしながらも、笑顔でベースに着きたいと、ひきつり笑いをしながら歩く。到着。みんなが迎えてくれた。

富士山での高所トレの効果が少しはあったのか、到着時は快調。お茶をいただいた後、遠征隊の行動食パック作りなどを手伝い、少しはお役に立てたかな?と思う。ゴミは持ち帰るということだっかが、やはり焼却して減量をはかるようだ。少し疑問。そんな作業をしていると、ベネズエラ隊の人がやってきて少し話す。もう一人のメンバーが7000m付近で消息をたったとのこと、精一杯生きているといいですねと伝えた。日本の方の物質的援助と気持に感謝しますと言っていた。

全員が集まって夕食。トレッキング隊のコックと違って、遠征隊のコックはおいしくないとのこと。今夜の食事もおいしいが、私はそろそろ高所障害がでてきたようで、あまり食欲はない。宴会途中で抜けだし、早めに眠る。

7月19日

寝ている分には大丈夫だが、かなりふらふらとしている。朝食には顔を出したが、お茶を飲んだだけで、食事はとれない。寝ていても治らないとは判っているが、目の前にテントがあるとシュラフに潜り込んでしまう。今日は氷河の手前まで行くことになっている。準備をして出発。

ベースからはゆっくりした登りで、そんなに進んでいないと思うのだが、ディアミールの壁が目の前に迫ってくる。氷河を渡る手前が私達の到達点でそれ以上は行けない。ルートの説明を受けて、C1の場所を確認、そうこうしているとルートとは別な壁が大きく雪崩、こちらに向かってくる。でもデブリは氷河をわたらずに基部で止まった。爆風がくるかもと身構えていたがそれもなかった。じっとしていると睡魔がやってきてふっとまどろむ。帰るよと言われて、眠っていたことに気が付いた。

ベースへ戻る途中ではマーモットや鳴きウサギなどの動物を見る。テントに戻ると、もうそのままシュラフに潜り込み、夕方までダウン。ヘリコプターが何度も飛んできたようだ。

もうあと2～3日ゆっくりとしていられたら、ここら辺を駆け回るほど元気になるんだろうなと思いながら、夕方のベースを見渡す。全員の写真を撮った。

7月20日

だいぶ高所に慣れてきたようだ。早々と出発していく遠征隊のメンバーを見送り、私達も下山にかかる。行きは小沢さんがいたけれど、帰りは私達4人。少し寂しい。もう荷物も少なく、ポーターも数人。お花畑の中を下っていく。やはり登りと違って、足取りは軽い。行きでお茶を飲んだ所で同じ石に座ってお茶をいただく。イブキジャコウソウのお茶だ。マウンテンティーで高山病によいとのこと。帰り道はモレーンを渡って行きと違う道を通るらしい。モレーンの中はガラガラとしていて、石の下は氷が顔を出している。そこをすぎると大きな木のある斜面に入り、白樺や松が数本加工途中で置いてある。ここである程度製材されてから運ばれるらしい。コックが山に入って美しい白樺の皮をお土産にとってきてくれた。マウンテンペーパーといっていた。

けっこう急な下りで、どんどん下る。ここの道は村の中を通らないようになっていて、村が見えているのに、いつの間にか遠ざかっている。だから村人の生活は覗けない。石積の家は遠くから見ると、建物のようには見えない。でも斜面に同化していて、無駄のない作りなのだろう。

下りきるとディアミール川にかかる橋を渡り、アッパルジェルの村に入る。行きとは違う道筋で村の下の方にある、メスナースクールに泊る。山の急斜面に張り付くようにあるアッパルジェルの村はけっこう大きく、入り組んだ水路がはりめぐらされている。小さな堰をつくっては、水を流したり、きったりして水管理をしているようだ。まるで日本の田圃のよう。きれいな水は別な流れなのか、手を洗いたいというと、水場のようになっている所に案内してくれた。

石鹸で手を洗い何日も使っていたバンダナを洗う。子供たちが来てはずかしそうに見ている。一緒に石鹸で手を洗うのを勧めようかとも思ったが、いくら石鹸でも畑に流れ込むかもしれないので多く使ってはいけないと、止める。コーランの時間らしく、歌のような叫びのような声が響き渡る。お年よりがお祈りの時間を知らせているのか?それにしても他の人たちは祈るようでもない。

メスナースクールに通っている子供が部屋にきて色々話していく。ポーターの同じくらいの子もきて話すが、英語があまりできなくて、指さすだけだ。靴下がほしいと言っているようだが、とにかく予備のものも持っていないので、なにもあげられない。細かいお金も持っていないので、女の子がビーズ細工を買ってくれと来たが、買ってあげられない。たくましい子供たちだ。あまり使われているようには思えない学校だが、トレッキングには利用されているらしい。メスナーはどんな風に思っ

ているのか。

だいぶ低い所にきたので、ようやく食事がおいしくなった。今晩が最後の夜になる。クレシードが食事の後にキャンプファイヤーをやるかと聞いてきたが、私達はさすがに早く寝ると言う。夜遅くまでポーター達はみんなで話していたようだ。

7月21日

いよいよトレッキング最終日。畑を見ながら、クレシードの説明を受ける。アッパルジェルの村を過ぎ橋を渡るとダウンジェル。そこで水車を利用した石臼を見せてもらった。トウモロコシが投入されて粉になって出てくる。日本にもあったはずだが、もうほとんど観光用にしか作られていない。エネルギーの使い方にも昔の人の知恵のすばらしさを教えられる。

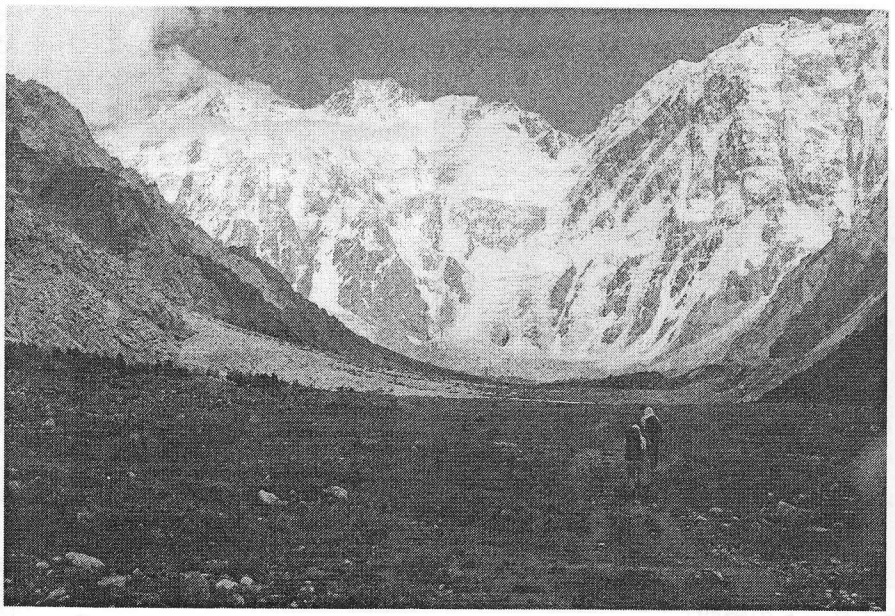
このダウンジェルからは道が険しくなる。それでも行きに較べれば、ずっと楽で、右側に落ちないように気をつければよい。はるか下にディアミール川が濁流となっている。まるで黒部の下の廊下のような感じで、少し緊張しながら歩く。風が気持ち良く、時々後ろを振り返りながら白いナンガの山塊に別れを告げる。植生も変わりローズマリーかラベンダーのようなものが斜面いっぱいに生えている。時々ちぎって香りを楽しむ。眺めを楽しみながら進むと道が大分よくなり、いよいよデュアムロイの村の入り口にさしかかる。

大きな胡桃の木の下にマットがしかれ、ランチタイムのようだ。木陰は涼しく、ポーターもコックもくつろいでいる。水路の茶色の水に粉末ジュースを入れて回しのみ。まあ、私達も沢水が泥っぽいことがあるけど飲んじゃうもの、同じね。ヌードルスープが最後のランチだったが、たまに食べるラーメンはおいしかった。ゆで卵にゆで山羊。これがまたおいしい。塩もおいしい。こんなに食べ物がおいしいと帰るのがもったいないと思う。あと2～3週間ここにいたいなと思うのは私だけのようだが。ランチタイムが終り、全員で記念写真をとり出発。デュアムロイの村を抜け、川沿いの道を進めば、まもなくハラレ橋、トレッキング終了。ポーターにやさしいクレシードが時間をかけて支払いをしている。それを待って、ランクルに乗り込む。ジープ3台もつらねてブナールへナンガコースターの道をいく。対向車がなくてよかった。ハクさんのガタガタのテープデッキから流るパキスタン音楽を聞きながら広い畑に出ると、トレッキングもようやく終わってしまったなと少し寂しく思った。

たくさんの親切によって、とてもすばらしいトレッキングができたことを感謝したい。

予定通りのフライトで帰宅し、ようやく落ち着いて写真を見ながら記録を書こうかなと思っていた矢先、突然メールが飛び込んできた、小澤隊員行方不明。しばらく何もできずに、生きていて下さいと祈るばかり。一週間が過ぎ、とうとう捜索が終了となってしまった。今回のトレッキングでも大変お世話になり、話す時間がたくさんあったので、様々なことを話した。次は、K2を目指しているとおっしゃっていたのに。ご家族、遠峰の方々のお悲しみを思うと、いたたまれない気持で一杯です。

ディアミール氷河に眠る小澤さんのご冥福をお祈りします。



BCからﾅﾝｶﾞﾊﾟﾙﾊﾟｯﾄﾞ全景

ﾄﾚｯｷﾝｸﾞ隊　全員で

夕食を囲んで:左　芝田隊員・右　小澤副登山隊長

関東ブロック大会　山岳競技会

平成十八年七月二十二日～二十三日

副審判長　土屋正昭

今年は、栃木県日光市を会場として、熱戦が繰り広げられた。この時期だから、当然猛暑の中での大会を予想していた。しかし、自然は計り知れないもので、梅雨明けが遅れ、気象条件的には暑いとは言っても曇りで、まずまずの中で二日間の開催が出来ました。初日のクライミング競技は、今市青少年スポーツセンター体育館で行われ、少年女子、成年女子、少年男子がそれぞれ二位、一位、一位で完登者二人を出し実力を遺憾なく発揮し、翌日の縦走に埼玉県関係者の誰もが期待を寄せておりました。ちなみにグレードは、少女が12a、成女12b、少男12dだと言うセッターの立木さん（柴田さんがチーフルートセッター）の話しです。

二日目の縦走競技は、日光市立東中学校グラウンドを午前八時五〇分に少女、成女、少男の一斉スタートで、鳴虫山山頂のゴールまで約五キロメートル、標高差約六〇〇メートルを一気に駆け登る過酷なものです。

我が埼玉県チームは、前日に体力を使い過ぎたのか？縦走技では、あまり成績は振るいませんでした。激戦の結果は、少女六位、成女六位、少男七位で、クライミングと合わせた総合順位も、少女三位、成女三位、少男四位です。残念ながら、全種別での本大会出場の夢は叶いませんでした。

関東ブロックを三位通過（今年は枠が一つ多いため）した少女と、予選なしで本選出場が可能な成男には精一杯練習し、決勝に向け大いに頑張って頂きたい。

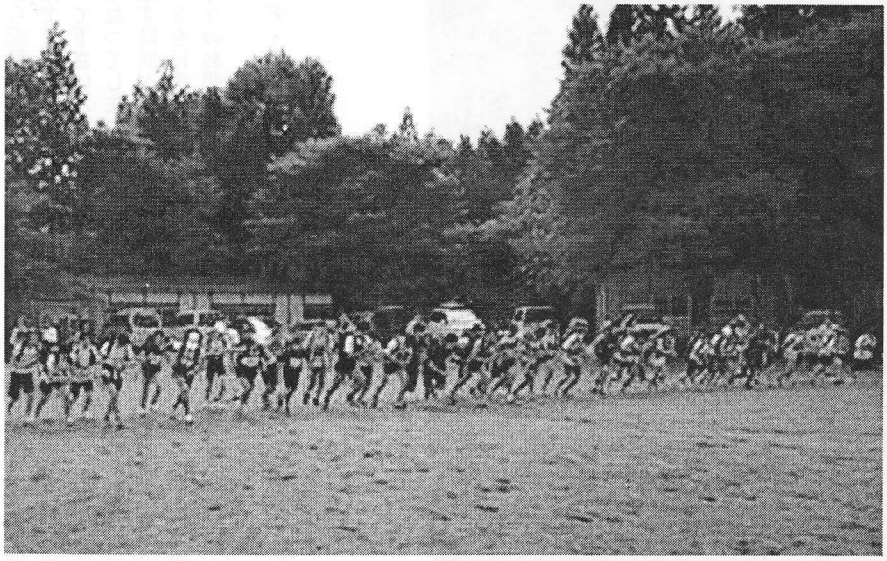
大会を終えて、自分自身の反省と感想ですが、県外役員として、ジャッジが担当任務ということでした。しかし、私には埼玉県内の大会しか携わった経験が無く、関ブロ一連の流れを掴むことが中々出来ませんでした。役員受付終了後、総務員・審判員会議から始まり監督会議、開始通告、競技、終了通告等々…特に一般の競技会と違って、関ブロ特有の各会場のチェックや、種別得点、個人得点、総合順位等は採点の優先順序が複雑怪奇で、何かの機会に研修しないといけない。と、自身の勉強不足を痛感いたしました。ともあれ、貴重な経験が、またひとつ出来ました。

ご協力頂いた関係各位に感謝し、来年は埼玉県が会場地（加須市と小鹿野町）です。

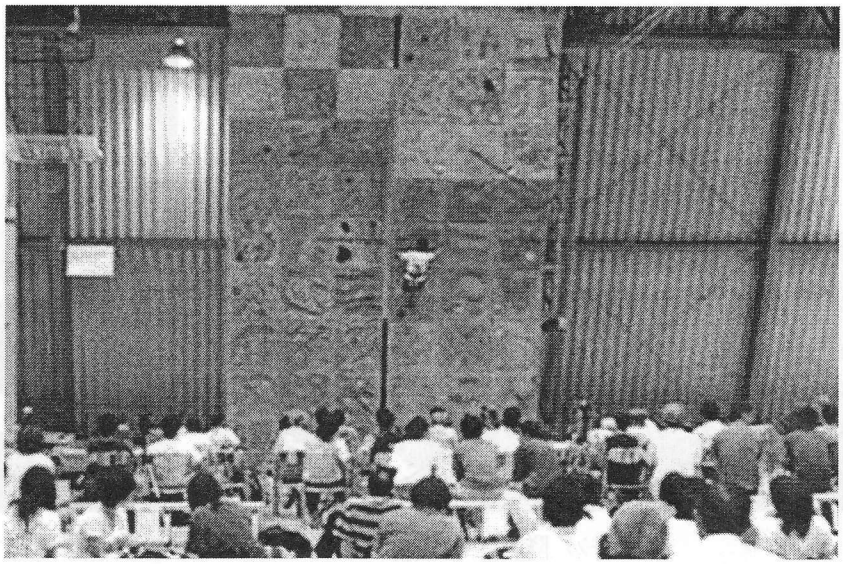
皆様の協力方、宜しくお願いいたします。

【関東ブロック大会の結果】

通過都県（少年女子）：千葉県・東京都・埼玉県
通過都県（成年女子）：千葉県・神奈川県
通過都県（少年男子）：群馬県・栃木県



「縦走！・一斉スタートの瞬間」



「熱戦のクライミング競技」

【インドヒマラヤトレッキング報告】

奥武蔵ワンダーフォーゲル
会長　新井宏司

２００６年８月２２日ＪＡＬ４７１便にてデリーまで、８時間３０分のフライト、デリー空港へは、当会の宮沢さん（某社のデリー駐在員）が出迎えてくれた。隊員は、男１０・女９・計１９名、観光ガイド１名の計２０名と運転手と助手、翌日は早朝に出発し、デリーから登山基地になるマナーリ標高２・２００ｍまでは約７００ｋのバス移動となり映り変わる景色を楽しみながら１９時間をかけマナーリの基地となる風来坊山荘へは、２０時頃着いた。

ここマナーリからは移動手段はジープに変わり、カシミール地方へ続く軍用道路と聞いたが、道路は一辺して悪路になり非常に険しい山岳地帯にはいる、今日からは高度順化のため数日の予定を組む、ロータンパス峠標高４，０００ｍ今日は霧の中、峠にはチベット族が旅の安全をお祈りするタルチョが風に揺れてだ、南側の斜面は一面のお花畑で高山植物の宝庫とか、私達一行を出迎えてくれたのはヒマラヤに咲くブルーポピー、噂では聞いていたが、美しさに一同感激する。

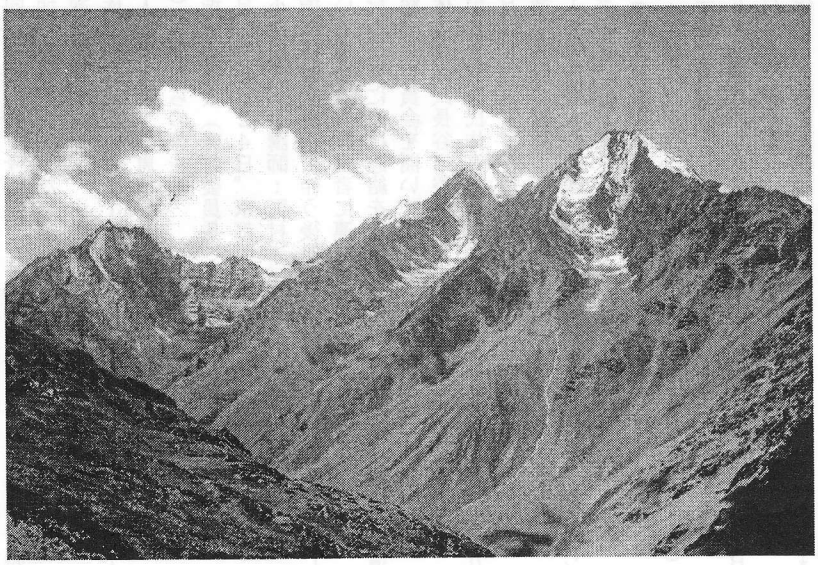
他には日本名でのエーデルワイス，トリカブト，タカネウスユキソウ，イワツメクサ，ホタルサイコ，ウサギギク，等数多くみられてこれらはインド，ヒマラヤの特産種であると、聞きました。

昨日は霧の峠であったが今日はロータンパスを越える時は快晴で、主にヒマラヤの一部ピルパンジャール山脈の、６，０００ｍ峰が美しく映し出され景色は一辺し、乾燥地帯になり潅木が無く眼下にはチヤンドラ川の流れと羊の放牧が見事なコントラストであった、峠を一旦下りチャンドラ川の畔り約３，７００ｍ付近のプテイー・ルーニーにて幕営をする、ここはチベット族の放牧地で草原が広がり牧歌的な雰囲気の中での一夜であった。

クンズムラ峠　４，５５１ｍを一旦下って今日の最高到達地点、４，７６０ｍも無事通過してチャンドラタール、標高２２００ｍ月の湖この湖は５，５６０ｍの無名峰より流れ出る氷河が一旦堰止められて伏流水となり湧き出た水の湖で天然のミネラルウオーターでもあるキャンプ地に着いた。

今日はリングタングアスマ、５，５５１ｍへのアタックである（女性はガイドとキャンプ地付近の散策と決めた）約４，６００ｍ～４，８００ｍ付近にて化石の大発見であった数億年前インド大陸が隆起して出来たヒマラヤ、化石は大小の二枚貝か多く持ち帰り記念した他には砂岩に含まれている黄鉄鉱？の入った石もあった。日没のため最高到達地点、５，０００ｍをあとに下山キャンプ地に戻った、最後の夜空は薄曇り、しかし予定どうりに山行に出来たことに満足する。デリーに戻りインドが世界遺産に登録されている、アグラ城・タージマハル他２ケ所を見学し、９月１日に無事帰国しました。

※編集注
平成１８年８月２２日～９月１日にかけて、計画された奥武蔵ワンダーフォーゲルの山行報告。



ﾛｰﾀﾝﾊﾟｽ　4,000m付近よりM7峰6,279mを望む

主ﾋﾏﾗﾔの一部　ﾋﾟﾙﾊﾟﾝｼﾞｬｰﾙ山脈　4,760m付近にて

ﾛｰﾀﾝﾊﾟｽにて　筆者

【埼玉県山岳連盟　平成１８年９月理事会報告】

9月12日（火）午後7時30分～　北本市文化センター

1・挨　拶（田中会長）ナンガ隊の事故について宜しくお願い致します。

2・報　告

（1）秩父環境シンポジウム：8／　秩父市主催

（2）ＪＯＣジュニアオリンピック大会：8／

門間　希美（不動岡高校）優勝

3・協　議

（1）埼玉２００６ナンガパルバット登山隊報告と対策について

・天野登攀隊長が挨拶の後、報告、質疑応答

・今後の対応については、「埼玉２００６ナンガパルバット登山隊事故対策委員会」が行う。

・9月12日、本日、死亡証明書（遭難死亡）が市役所で正式に受理された。

（2）奥武蔵リレー清掃登山について（山口自然保護委員長欠席）

・本年度は、期間を決めての同一行動等の活動はしない。

・実施した会があれば、自然保護委員会に報告して下さい。

・委員会としては、今後の活動について十分検討したい。

・個別で実施した場合の法律的問題→「ゴミは拾ったところで処理する」のが原則。自治体の協力が必要。

（3）平成１９年度関東ブロック大会埼玉大会の計画について

（長谷川国体委員長）

・期日，場所　平成１９年7月２８日（土）クライミング加須市民体育館→宿泊：小鹿野町２９日（日）縦走・小鹿野町観音山

①役割分担等→次の理事会で「氏名をあげて提案する」。事前に役員のすり合わせ。

②関東地区競技部研修会の開催（埼玉岳連の主管）期日等について打ち合わせを持つ。

・輸送は、個人。集計ソフト手配（調整）。故知年は、通過県の発表がうまくいかなかった。

・9月２０日小鹿野町へ挨拶（田中・村岡・長谷川）

（4）会員証の発行について（加藤事務局）

・登録関係書類の集約が遅れ、発注に至らない。今月中に発注する。

・現在　団体，　名の協力あり。

◆一覧表を見て、ご協力をお願いします。

（5）その他

①県体クライミングについて：12月17日（日）加須市民体育館

・次回正式に提案。今年は、たくさんの人（１００人目標）が参加できる大会にしたい。

・予選はフラッシング。決勝はオンサイト。

②奥秩父納牌式11月11日（土）17：00～甲武信岳（１０人程度参加）→恵流峰会　逸見照三氏へ連絡。

（6）各部からの報告等

①指導委員会（野村委員長）

・9月・23・24日。京都，日山協・登攀研修会一般参加：小茂田氏，（講師：野村）

・準指導員制度廃止に伴う後処理について→自分の会に所属している場合は，該当者に連絡を取って欲しい。

→野村委員長に直接連絡を取って貰う。連絡無き場合は，指導員総会→委員会を開いて決める。秋に実施。

②国体委員会（長谷川委員長）

・第６１回国民体育大会　兵庫大会9月３０日（土）～１０月３日（火）　神戸市

・選手登録の確認。

・19年度県大会（国体選手選考会を兼ねる）「クライミング」6月，縦走：4月下旬。

③クライミング委員会（大倉委員長）

・スポーツクライミング大会（県体）１２月１７日（日）

④選手強化委員会（小茂田委員長）

第６１回国民体育大会　兵庫大会9月３０日（土）～１０月３日（火）神戸市

成年男子／監督：佐藤　豊（ＭＡＳ・アルテリア）※永井氏→本橋和之氏

選手：早田俊幸（本田技研）、永井順明（本田技研）、島村太郎（ＭＡＳ）

少年女子／監督：大倉　至（高体連・庄和）

選手：中村　光（鴻巣）、門間希美（不動岡）、落合保奈美（庄和）

スタッフ：小茂田強化委員長／森下健七郎副会長／村岡正己理事長

⑤遭難対策委員会（瀬藤委員長）

・12月8・9日、冬山レスキュー講習会　日帰り2日間、クラス分けをして実施する。

→参加者に田中会長より参加賞（２００７年カレンダー）のプレゼントあり。→次回要項の配布、募集開始。

⑦海外登山委員会（塩谷委員長）

・ナンガパルバット隊員挨拶（天野・鳥・石橋）

・トレッキング隊挨拶（松木さんより）

⑧ジュニア委員会　◆小澤さんの代わりに、高体連より推薦してほしい。

⑨広報委員会（岩井田委員長）

※広報発行10月末発行　内容（加須カップ／関東ブロック大会／ＪＯＣ門間　件

⑩企画委員会（村岡委員長）

・ジャパンカップ（12月23・24日）の開催（開催の方向で進行中・岳連の負担無し）

⑥事務局（加藤）

各種応募

①平成１８年度山岳遭難救助研修会文科省：11月1日～5日

文科省登山研修所他9月25日締切

②弥山開創１２００年記念弥山ハイキング及び広島県登山フェスティバル：10月27・28日　広島県　会費：６０００円

次回：10月17日、12月12日・常任理事会

：11月14日　理事会

県体クライミング　：12月17日(日)加須市民体育館

冬山レスキュー講習会：12月8・9日　伊奈・県活動センター

ボルダリングジャパンカップ：12月23・24日　加須市民体育館（日山協主催）

第８回関東地区スポーツクライミング大会：11月12日(日)千葉県※参加希望者は，大倉委員長へ問い合わせて下さい。（選手強化委員会とクライミング委員会で調整します）

雲取山清掃登山：10月14日(日)12時雲取山現地集合（環境省主催）

奥秩父納牌式：11月11日(土)17時～甲武信岳→秩父

恵流線会：逸見照三氏へ連絡

編集後記

ナンガパルパッド隊は、非常に残念な結果となり、関係者の苦慮が偲ばれる。出発前に県岳連・海外委員会の総会で顔をあわせ、深夜まで海外遠征について色々話を聞かせてくれた、小澤副隊長のあの笑顔が見られないのが非常にさびしい。個人的にも浦和市岳連当時より遭難対策委員会の主要メンバーでもあり、ご一緒に活動したことが思い起こされ非常に残念に思う。心からご冥福をお祈りしたい。

広報委員会　岩井田　正昭《miwaida@mua.biglobe.ne.jp》